

# 夏の集い

青少年部では、早良組仏教婦人会ならびに蠟燭講員の皆様のご理解とご協力をいただき、毎年春には花まつり、冬には子ども報恩講といった、小さい頃から仏さまに手を合わせるご縁を持っていただけけるような活動をしています。中でも夏に行う「早良組こどもの集い」では隔年で京都のご本山へお参りしています。本年度は7月28日〜30日にかけて京都・本願寺へ参拝しました。大阪のUSJにも立ち寄り、子ども達にとって楽しい夏の思い出となったようです。



京都 西本願寺にて



明性寺にて

## こども報恩講

平成27年11月29日(日)明性寺

平成27年11月29日明性寺にて「子ども報恩講」を開催しました。前半の昆虫写真スライドショーでは写真家の近藤博光さんが撮影した迫力のある昆虫写真に一同興味津々。後半は京都の薫玉堂さんがお越し下さり、匂い袋作りを体験しました。6種類のお香の中からそれぞれ自分流にブレンドして、世界に一つだけの匂い袋を作りました。このような活動を通して、子ども達がより気軽にお寺に足を運ぶきっかけになればと願っています。

# 伝灯 今も灯る早良の講



早良組  
だより



## 戦争の記憶



## お念仏とともに

～菰田恒さんに聞く～

福岡大空襲があった日のことです。空襲の音で目を覚まし、布団を被って外に出た時、辺りは火の海でした。自宅の裏山が燃え、里の本家が燃え、家族はみなバケツを抱え消火にあたっていました。焼夷弾の管やパチパチと燃える山の音。もちろん楽しいことだって無かった訳じゃありませんが、そんな光景が私の青春時代にはありませんでした。

戦争に負け、女学校を卒業した私は、結婚するまで実家の農業を手伝いました。

## お寺へのお誘い

四箇村の菰田家に嫁いだのが27歳の時です。お寺との関わりを思い起こしてみますと、近所のおばあちゃんたちが、お経の練習しましよと私を誘ってくれたのが最初だったと思います。明法寺のお同行のおばあちゃん達が4、5人集まれ、ご自宅で「正信偈」の練習をされていたのです。何も知らない私を育ててくださった最初のご縁です。後にこの出来事のことを主人に聞いてみましたら、義母がお経の練習しなさいなんて言ったら姑根性になるからと、近所の方に私を誘ってくれるようお願いしてくれていたことを知りました。今だったら分かります。仏様を大事にしてほしいという義母の願いだったのでしよう。今は娘がお寺に関わってくれていますが、これほど嬉しい事はありません。

近所のおばあちゃんのお育ては、お寺の中でもありました。お齋でいただくかぼちゃの切り方からご門徒さんとの付き合い方まで様々なことを教わりました。まだ若かった私は「もうついていきません」と弱音を吐いたこともありましたが、しかし家ではそんな事一切習いませんでしたので、今はとても感謝しています。お寺での様々なことに慣れるまで10年はかかったでしょうね。

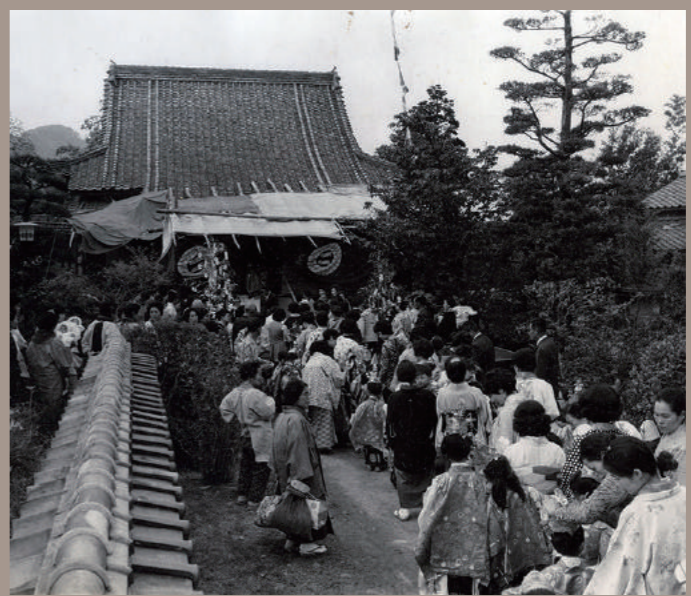
## さわら 今昔物語

～瑞華山 浄覚寺～  
福岡市早良区重留

早良組の今と昔を垣間見るシリーズ「さわら今昔物語」。今回は早良区重留「浄覚寺」の今と昔をご紹介します。



昭和20年代の本堂の様子



1972(昭和47)年  
親鸞聖人700回大遠忌法要



2011(平成23)年建立の  
新本堂



2014(平成26)年  
親鸞聖人750回大遠忌法要

1519(永正16)年に開基した浄覚寺は、間もなく開基500年を迎えるそうです。その中で、幾度が本堂が改築されてきましたが、5年前に1845(弘化2)年上棟の旧本堂を解体し、新本堂を建立されました。法要の様子では、みなさんの服装や髪型で、昔と今の時代の違いが感じられますね。



組内向け、寺院にご縁のない人々に向けての情報、また、ご法義の発信など。  
早良組だよりへの取材のご依頼・お問合せは、栄福寺内 ☎851-9656 まで



## ご法話は 住職のための話？

お寺にお参りさせてもらおうようになったものの、お聴聞させてもらう度に「ご法話はご住職のための話」だと思っていました。報恩講のご法話もいつ聞いても同じ事を言っておられる。「ご講師はまた同じ話をされておる。それはもう何回も聞いた」と聞く耳を持たなかったのです。全部私のためのご法話であり、何度も同じ話をされていたのはそれだけ大事なことだったと気が付いたのはつい最近のことからです。それまで命をいただいた事は有り難いことでありました。

## 迷いのただ中に

33歳の頃、肝臓を患い手術をしました。しばらく静養していましたが腎臓まで悪くなり、家族が心配し里帰りを薦めてくれました。里に帰ると親戚がお見舞いに来てくれました。その親戚の一人が、あんまり可哀想だからと、紹

介してくれたところがありました。同じ仏教でもご宗旨が違うお寺です。一向に良くならない病を抱え、何かにすがりたかったのですね。家族の目を盗み、たくさんのお寺に通い、言われるがまま先祖供養やご祈禱をしました。5年は通ったでしょうか、お金が尽き途方に暮れた頃、浄土真宗の聖典にあった「正信偈」や生活信条を見た時に、「私は迷っておった」と気が付きました。迷っている時は自分が迷っておることに気が付かないものですね。ほんものに遭遇した時、迷いの闇が破られていくのです。

浄土真宗の阿弥陀さまは根本が違いました。拜んでいた私が阿弥陀さまの方から拜まれていたのです。このことに気付かせてもらうまで随分回り道したなと思います。しかしこの回り道が尊いご縁でありました。「私の話でありました」といただくようになったのはこの頃からだと思います。

子供達にはこんな苦労はかけたくないからと、いくら忠告しても同じでしょう。何事も経験してみないことには分からないのです。しかし一人でも多くご縁に遇っていただきたい。一座

## ご報謝の人生に

でも多くご縁に遇っていたら伝えたい。阿弥陀さまはいつもあなたと一緒によと。心からそう願っています。

人間は苦勞するために生まれて来たのかもしれないね。ある方が「私は今まで何の心配もせず生きてきた」とお会いする度にそんなお話をされていました。私はいつも羨ましく思っておりましたが、晩年にご苦勞されました。あの方もやはりご苦勞の人生だったなと思う時、人には言えぬ悲しみをみんな抱えて生きているのだと、あらためて味わわせていただいたこととあります。

私の苦勞や悲しみを知り抜いて、ここにご一緒の阿弥陀さまです。今までの苦勞は、阿弥陀さまにお出遇いするためのものだったと気付かせていただいたとき、いつの頃からか阿弥陀さまが中心の人生に変わりました。

七高僧さまや親鸞聖人のご苦勞はもちろんのこと、私をお育て下さったお一人お一人にただ感謝を申すばかりです。

## 特集

# 今なお残る 早良の伝統

# 講

「講とは」ともともと、「講」とは同一の信仰を持つ人々による結社を指しました。浄土真宗においては「御文章」の読み聞かせを行った「講」が「寄合談合」と呼ばれ、同じお念仏の教えを聞くもの同士で議論し、お互いの信仰を確認して行きました。また、早良の地には140年近い歴史を持つ「蠟燭講」があります。今回は、私達早良組のお寺に今も残っている「講」や、地域と密着した伝統行事を紹介いたします。

## 早良組 蠟燭講

「早良組蠟燭講」は、世の中が混沌とした明治維新の時代に、早良郡内の御同行が「親様の御前に報謝の一灯なりとも捧げたい」との念願をもって、明治11年7月に創立されました。翌年には本願寺に申請して認可されています。

その当時、講員一人につき二厘宛て報謝のもとに、筑前名産の甘木蠟燭を手にして徒歩で京都の本願寺へお供えに行かれたそうです。このことが明如上人（本願寺第21代門主）の御心に留まり、明治14年5月24日に、早良組蠟燭講に対し御消息（お手紙）が下付されました。

以来毎月 13日に、早良組内の御法中（僧侶）の御出勤を仰ぎ、お勤めされています。また、毎年春秋の2回（3月13日と9月13日）は浄土三部経を拝読しております。

## 西念寺の お取越報恩講

### 【お家で報恩講様】

浄土真宗では代表的な「講」に

「報恩講」があります。一般寺院やご門徒の家庭では、御正忌に本山にお参りできるように1月よりも前に取り越して報恩講が営まれます。私達早良の地ではご門徒の家庭で営まれる「報恩講」を特に「お取越報恩講」と言います。古くから多くの「お取越報恩講」が営まれてきました。今では少数となつてしまいましたが、

田村の西念寺ではご門徒さんによる「お取越報恩講」が今なお営まれています。数件のお家が寄り合つて、毎年順番に当番を回します。当番のお家を残して一軒一軒お勤めがあり、最後に当番のお家でお勤め・御法話・お齋が振る舞われます。翌日にはそれぞれ家族が

揃つてお寺にお参りされ、親鸞聖人のご苦勞・ご遺徳を偲ばれるのです。ご門徒さんとお寺と一緒に、阿弥陀さまのお法を伝えていく地域の大切な習慣です。近年は様々な理由からこの「お取越報恩講」が勤められなくなっているそうです。お念仏相続の大切な仏事を、地域とお寺が一体となつて大切にしたいものです。

## 顕乗寺の 飢人地蔵

### 【浄土真宗のお寺の境内に お地蔵さん!?】

早良組、祖原にある顕乗寺の境内には「飢人地蔵（ウエニンジウ）」と呼ばれるお地蔵様がお安置してあります。飢人地蔵とは、享保十七年（1732年）の大飢饉の際に出た多くの死者のお墓に建てられたお地蔵様です。福岡では中洲川端の「川端飢人地蔵尊」などが有名で、毎年8月にお祭りが行われます。祖原の顕乗寺では毎年7月24日にお寺でお参りがあります。今ではお参りのみですが、昔は出店や舞台まで準備されそれは賑やかなお祭りだったそうです。もと



取材後記

今回は四箇・明法寺のご門徒であります菰田恒さんにお話を伺いました。大正14年にお生まれです。今年で91歳になられます。年齢よりも随分とお若く見え、阿弥陀さまのお話をされる時の柔和でやさしい表情が印象的でした。ご苦勞を重ねる度にお慈悲を味わわれたのでしょうか。ご家族にはもちろんのこと、ご門徒や多くの方にこのご法義に出遇っていたらいいと語っておられました。阿弥陀さまの願いが、菰田さんを通して私に呼びかけてくださるようでありました。



様を、お寺の境内に移動したのは顕乗寺の前々住職と言われています。その時の世話人の方が古くなつていた祠を造り替えられ、今の立派な祠が建てられたそうです。お寺も大事に、仏様も大事に、そして地域の事も大切にされた当時のご門徒の方々の様子が覗えます。

### 取材後記(まとめ)

一言に「講」といっても様々な形があります。「蠟燭講」のようにご本山の護持の為に結成されたものや、田村の西念寺のようにご門徒の方々によって結成された「お取越報恩講」。そのほか、全国各地やご本山にも「仏飯講」や「お花講」などもあります。「講」結成の背景には念仏禁制や廃仏毀釈などの様々な理由があります。今回、「講」について調査するなかで、「お取越報恩講」や「蠟燭講」が今も続けられているという尊さにあらためて気づかせていただきました。先人のご苦勞を偲び、また後世に残していけるよう私達にできることを今一度考えさせていただくご縁でした。